

アトリエ琉游舎だより 220号

アトリエ琉游舎 ryuyusha.com/
琉游舎for healing <https://toi101izuru.wixsite.com/mysite-3>

2025年12月17日発行

新年祈祷会

2026年1月1日元旦午前10時半より琉游舎にて

★午前10時半より執り行います★

★近くで一番早い初詣 琉游舎の新年祈祷会★

★30分ほどの法要です 新年をお祝いいたしましょう★

★新しい一年が豊かで実りある年になることを祈念しましょう★

★新年にお越しいただいた方に琉游舎の手作り御守護を差し上げます★

●ご守護（お守り）はこれを持っていれば願いが叶うとか、安心安全に毎日を送ることが出来るということを保証するものではありません。もちろん頼みごとの依り代でもありません。持っているだけでは唯の紙切れです。

●お守りは「家内安全でありますように」「志望校に受かりますように」「事故を起こしませんように」という自分の誓いを、ちゃんと一年間忘れないようにと見守ってくれるもの。私たちの誓いの備忘録であり見届け役のようなものです。

●一年の計は元旦にあり、でも三日坊主も人の常。そんな私たちを一年間密やかに見守ってくれる守護袋になればよいなと思っています。琉游舎でお待ちしています

12月・1月スケジュール

			木	金	土	日
			18	19	20	21
22	23 読書会 13時半から	24	25	26	27	28
29	30	31	1月1日 新年祈祷会 10時半	2	3	4 写経会 13時半から
5	6	7	8	9	10	11
12	13	14	15	16	17	18

読書会

12月23日（日）
13時半から

写経会

1月4日（日）
13時半から

初詣と言う習俗はよく考えると不思議なものです。皆さんはお寺に行くのか神社に行くのかそれとも両方を参拝するのかどちらでしょうか。新年最初に神社やお寺へ参拝して、旧年の感謝と新年の健康、安全、幸福を祈願する年中行事を初詣と呼ぶのでしょうか、不思議なことは、神仏両方に祈願することが日本人には可能であり、矛盾しないと信じて詣でていることです。かく言う私は僧侶ですから、元旦にはお釈迦様と日蓮聖人の前で自ら新年の法要を行い、旧年の感謝をし、新年の安らかな日々を誓います。その後近所の生駒神社（勝善さん）に行き頭を下げ、数日内に羽黒山を40分登り羽黒神社で頭を下げ、最後は車で1時間半ほどの古峰神社へ干支の土鈴を買いに行きます。これがここ8年間の年始の一連の初詣と思われる私の行動です。

この行動が僧侶の私の中で矛盾なく行われていることは、日本人以外の信仰者には信じられないことだと思います。日本人であっても僧侶にあるまじき行動と非難する者はいるでしょう。日蓮聖人のご遺文「三沢抄」には「内房の尼御前が氏神への参詣ついでに身延の日蓮大聖人を訪ね、面会したいと申し出たことについて、その本末をわきまえない不心得を正し、法華経を根本とする信心の基本姿勢を教えるために面会しなかった」と記されています。しかし聖人は神様を排除していたのではなく「神は所従なり法華経は主君なり」と語っていたように、法華経では神は独立した信仰の対象ではなく法華経と法華経の受持者を守護する働きという考え方です。つまり主君である法華経に対して神は家来の立場であり、家来のついでに主君を訪ねることは仏法の道理にも世間の道理にも合わないと聖人は言われているのです。これが神仏習合の考え方です。これに対して明治維新の行った神仏分離令は神を仏の家来から解放し、あらためて天照大神（天皇）を頂点とした信仰のピラミッドを作ることが目的でした。しかしその陰謀は果たして成就したのでしょうか。

私が出家した当時、大きな違和感を覚えたのは、神仏習合の考え方でした。それまで一切の宗教知識や宗教生活から離れたところで生きていた私は、出家以来、猛烈な勢いで仏教の基本、法華経、日蓮の思想について本を読み、仏教の基礎知識を身につけようとしていました。しかしそこで得られた論理的な知識と、実際の生活の中にある寺院や僧侶などの宗教的な環境との間に大きなギャップを感じずにはいられませんでした。例えば寺院の中の本尊がお釈迦様だけでなく、様々な仏が存在すること、菩薩の位置付けも分かりづらく曖昧です。本尊の回りを守護すると称して配された神々、また神である北斗妙見菩薩や鬼子母神などが単独で祀られていることもあります。私たちの信仰の対象は何であるか（本尊）が、寺によって分りづらいのです。しかしそれに対して納得できる論証は何処にもないことに、同じ宗教とはいえ仏教は他の国々で信仰されている一神教の宗教と根本的な相違があるのではと思い始めました。仏教は異端を排除せず、布教の先々の民族の原始信仰をも取り入れていく寛容な宗教ではないかと言うことです。事実仏教には異端裁判も異端を判断する宗教会議もありません。教えの根本さえ押えていればそれぞれの民俗信仰（原始宗教）と融合し異端として排除されない宗教なのです。では仏教の教えの根本は何か、それは世界の捉え方にあるのです。「諸行無常」「諸法無我」「一切皆苦」「涅槃寂静」です。この根本と仏教の持つ寛容（慈悲）の精神と、一神教の根幹にある「絶対者の意志（真理）」というものはない、という仏教真理を受容すれば、神仏習合の精神は日本人にとって必然なのです。私の神仏習合への違和感は西洋的思考に制御されていたということです。

しかし、私は日蓮聖人を始め、日本佛教の創始者や繼承者の考える「神は仏の権現（仮の姿）であり、仏は神の上位概念にある」という仏教者から見た考えは採りません。仏教が日本に受容される以前の日本に立ち返って、名もなきわたしたちがホトケとカミの出会いを目の当たりにし、わたしの中で神仏が習合していく過程を見るべきではないかと思っています。私にはそれを学術的に論じる能力はありません。しかし、全くの宗教的白紙状態だった私が、出家以来12年間に自らの「知と情と意」に書き込んできたカミとホトケの軌跡を省みることで、日本人の神仏習合受容の一端でもとらえることができるのではないかと考えています。

佛教伝来以前の日本人は八百万のカミと共に暮らしていました。それは世界を思考で把握することではなく、私自身が自然（世界）と共に存しながら生きているのだという、感覚的精神的な世界把握だったのであります。世界との一体感（生きると言ふこと）が八百万のカミとの共存を実感する世界、それは時には豊かさや優しさを、時には苦難や厳しさをもたらす生きることそのもののカミです。私はそれが日本人の「情（精神）」として流れる生きる力だと考えます。一方、仏教は世界をありのままに把握する智恵を与えてくれました。仏の法（知）です。それがここまで日本人が存在できた生きる智慧です。ここに八百万のカミ（情）とホトケ（知）が出会い神と仏に合体しました。日本人オリジナルの神の精神と仏の智慧との出会いです。

日本人は、明治維新によって日本人の精神と智恵の根底にある神と仏の共存（神仏習合）の考え方を無理矢理引き裂かれてしまいました。西洋文明の受容によって日本の植民地化を阻止するという大義は理解したとしても、日本固有の精神と智慧まで破壊する必要はなかったと思います。西洋の絶対神の論理に従って世界を見ることを強要されておよそ150年、主觀と客觀（私とあなた）の融合あるいは屈服・征服の二項対立の中で世界の真理（本質）を組み立てるという理性の絶対化の限界が、今はっきりしてきたのだと私は考えます。つまりは日本人の一神教化、絶対神信仰は無理だと言うこと、その論理（理性）に従って世界構築をしてきた日本の、西洋との同一化は根本的に不可能だと言うことです。それは日本人が世界を理性で理解することも不可能だと言うことです。つまり、日本も日本人の信仰も日本人のあり方も理性と一神教の世界が規定する方法論で説明し理解し実践することは不可能だというとんでもない結論にならざるを得ないです。